

受け継ごう先人の思い 語り継ごう次世代へ

『もったいない』で再生する地域の絆

モデル公民館(H22～H24)

浜田市立白砂公民館

【取組の概要】 地域の特産品である「西条柿」を生かした地域づくりを進めるために、高校との連携による「地食甲子園への出場」、紙芝居の活用と語り部人材の発掘などに取り組んだ。「もったいない」をキーワードに住民の学び合いをもとに地域の絆を強めている。

1 本事業に取り組もうと思った理由

白砂地区は鳥根県下でも美味しい西条柿を出荷する生産地で、東平原に行く四季折々に見ることができる日本の原風景とも言える柿畑の景色が広がる。

しかし、高齢化と後継者不足による生産意欲の低迷、地域の宝でありながらそれが当たり前になってしまい、良さに気付かなくなっている現状があった。

個々には、豊富な経験と知恵を持ちあわせ、その良き個性を表舞台にひけらかさない実直な地域の風潮の中、公民館はじめ、各会がこつこつと地域事業を行っていた。しかし、今後の地域のあり方や浜田市の主幹産業の西条柿の生産を維持していくには、生産者も地域住民も一人ひとりが意見を出し合い、議論をし、向き合っていかなければならない、待ったなしのまちづくりの時期がきていた。

折から採りきれないで残っている西条柿の『熟柿』を『もったいない』と感じ、何とかならないものか、みんなを元気にしてくれないものか…という一念でスタートした。

2 公民館としての仕掛け

(1)真空保存機の購入(平成22年初年度)

熟柿をはじめ様々な四季の食材を試行錯誤しながら保存しはじめた。生涯学習推進委員会が中心となり人の動きを作る。また、本事業前から行っていた柿洪の仕込みを生涯学習推進セミナーとして扱い、できた柿洪を使って、三隅中学校・三隅小学校の学校支援、児童クラブとの子ども事業の充実につなげた。

(2)西条柿の興り、地域の記録作り(平成23年度)

いつ？だれが？なぜ東平原に？口伝も大切だが、記録として残すことにより正しく後世に伝えることができる。その記録を基に公民館を利用する絵手紙教室・習字教室サークルに制作を一任。資料づくりに関わってもらい記憶をたどる作業のやりとりの中から、高齢期であっても地域や公民館を担う一員であることを意識してもらった。

また、完成した紙芝居は小学校の事前学習に活用されはじめた。他にも地域住民が地元ケーブルテレビスタジオで音声吹き込みDVDに編集してもらった。

縁あって、第5回浜田市食育フェスタで真空保存しておいた熟柿からジャムを作り、使用してもらうことにより福祉課との横のつながりができた。

(3)広報活動を充実させる(平成24年最終年度)

過去何十年と西条柿を通して地域は学校支援活動を行ってきたが、これらを広域に発信することにより外からの反響で地域住民が元気になることを期待した。

また、各地で公民館事業に高校生や大学生が関わることによる相乗効果の実績から、柔軟な発想且つ広域に情報発信できる力を期待し、本事業のまとめの年と位置付けた。高等学校との連携の目的は、高校生にある豊かな発想と広報力を地域に反映させること。島根のふるさと学習の集大成ともいえる高校3年で、地域との関わりを振り返りながら次のステージへ進んでほしいという思いがあった。奇しくも、はまだ産業振興機構主催、地食甲子園 in はまだのスタートの年で、エントリーした「熟柿パフェ」で高校・地域・小学校の学校支援が実現した。



平成25年度第2回 地食甲子園 in はまだの会場模様
(春巻きin獄そばwith西条柿)

ハイクオリティアイディアクリエイティブ賞受賞

3 事業の成果(地域の変容・公民館の変容)

(1)地域の変容 (学校含む)3点

紙芝居・DVD は学校からも地域からも利用の依頼が増えた。視覚からの資料は理解してもらいやすく、地域の人の温かみのある音声は受け入れてもらいやすい。

- ① 学校支援内容が充実した
- ② 地域内外から継続した反響がある
- ③ 生産者から「嬉しい」の声が聞けた

生涯学習推進委員会を中心に、西条柿を活かした白砂地域でなければできない事業を継続的に行った。地域でも「やって良かった！」という反響が大きく、事業をとおして、地域がより協力的になっていった。例えば、生涯学習推進委員会主催の「生涯学習推進セミナー」を地域の「柿まつり」に併せて開催することで、集客力・情報発信を効果的に行い、柿まつり実行委員会からも歓迎されるwinwinの関係を保つことができた。



(2)公民館の変容2点

- ① 広報の重要性を認識
- ② 高校大学が入る好バランスの実証

事業終了後の25年度は、3ヶ年の成果が形として現れた年度になった。広報(公民館だより・地元ケーブルテレビ・新聞・テレビ等)を効果的に使うことで関係者の活動を多くの人に伝えることができ、地域の活性化につながった。高校・大学との連携はその年齢層が無い白砂地区にとって大切であった。

高等学校とは、西条柿だけにとらわれず三隅自治区全館の地元食材を学習し直し情報発信することで公民館同士の連携につながった。一閑張りバスケットに食材を詰め込み『みずすみモリモリ』として、島根から東京に向けて情報発信する「にほんばし島根館」での販売実習にこぎつけた。もちろんこの企画も本年度当初、高校生が立案したものである。

大学とも本事業前からの連携はあったものの、紙芝居を未就学児・低学年に読みやすい食育絵本に編纂し直す過程で深くかかわることができた。『さいじょうかきえもん』の10冊の絵本が完成したことは、本事業の大きな成果である。

4 公民館として「地域力」を醸成するために大切にできたこと4点

- (1)活動報告と計画のお知らせ
- (2)繰り返しことあるごとに
- (3)アンケートで検証
- (4)相手の動きやすさ

地域住民に対しては、様々な媒体を使って広報しても、時間が経てば気持ちが薄れるし、忘れることもある。年度初めと年度末、また年度途中にて必要と思われるときに必ず活動報告と計画を伝えてきた。

そしてアンケートを適宜行い、検証するデータを残し、見直したり事業推進上、気を配ったりすることを明らかにすることに努めた。地域の方の仕事や高校生・大学生の学業を優先したり、先生方の授業との関係で相手が動きやすい時間帯に沿った連絡調整に努めたりした。

4 今後に向けて

良い方の変容だけでなく、地域が何を望んでいるのか、求めているのかを注視しつつ、必要課題は誠意を持って伝えて行くことも大切だと感じた。

しかし、広報を意識した2年間は、活動範囲が広域になった分、地域の人と過ごす時間が少なくなったのは確かだ。 “広報の力と公民館の原点”を認識できた。地域の人顔が見える公民館、声が届く公民館で有り続けることを忘れてはいけないと感じた。

「東平原に最適な果物は『西条柿』だ！」と、長見弁一さんが広島西条から西条柿の苗木を取り寄せてから約90年経った。次世代を担う子供や保護者のために本当の甘味、本物の安心安全な味覚発達に必要な西条柿。医療分野においても未知の可能性を秘めた柿渋が白砂地区にはある！という思いを持ち続けながら、まちづくりの手伝いができることを願う。

- ・地域の声を聞き
- ・対話をしながら
- ・時代に即した事業を提供し
- ・引き継ぎたいことを伝えて行く



食育絵本「さいじょうかきえもん」完成を一緒に祝う県立大学読み聞かせサークル「ゆるりの会」と営農組合加工部のみなさん